

ヤンデレヤクザの束縛婚から  
逃れられません!

---

古亜  
*Furua*

## 目次

ヤンデレヤクザの束縛婚から逃れられません！

s i d e 志弦

265

s i d e 威弦

301

書き下ろし番外編

黒、襲来

317

ヤンデレヤクザの束縛婚から  
逃れられません！

## プロローグ

……真つ暗な夢を見ていた気がする。

でも今の私を感じているのは暖かくて柔らかな布団の感触で、もう夢からとつくに覚めているんだろう。

薄目を開けると柔らかな光が差し込んで、朝なら仕事に行かないと、なんて思っただけで起きた。

「ん……？」

私の職場は喫茶店なので朝が早い。オーナーは温厚な人だけど、時間には厳しいから遅刻は……って、ここは、どこ？

私が暮らしているのは手狭なワンルームの古いアパートのはず。十畳以上はありそうなんだっ広い和室に住んでいる覚えはない。旅館っぽいけど、それにしてもなにもなさすぎる。机も座布団もなく、ただ私が寝ている布団しかない。

物といえば床の間に置かれた洪い花瓶くらいだ。あとは壁にかかった時計。障子の向

こう側が明るいので、今は昼の一時……あれ？ 昼の一時？ え、完全に遅刻？ いや、でもここはどこなの！？

わけがわからず呆然と辺りを見回していると、ドタドタと足音が近付いてきて、勢よく襖ふすまが開いた。

現れたのは黒色のスーツに身を包んだ男性……知らない人だ。

歳は二十代後半か三十代前半くらい。後ろに撫で付けた短めの黒髪と、どこか冷たさを感じる三百眼が印象的なその人は私と目が合うと、端正な顔に安堵の表情を浮かべた。

「目が覚めたか」

男性はそう言っただけで私の傍に膝をつくと、私を抱きしめようとするかのように両腕を伸ばしてくる。怖くなった私は咄嗟にその手を払い除け、身体を反らして距離をとった。

私の反応に男性は驚いたように目を見開いた。

「どうした？」

どうしたもなにも、私はこの人を知らなかった。

私の人間関係はさほど広くない。職場である喫茶店はオーナーも含めて従業員は全員女性で、男性は数少ない昔からの知り合いと大学時代から付き合っている彼氏だけ。

お客さんかと思っただけ、こんな美丈夫がお店に来たら覚えてはいるはずだ。

しかしいくら見た目が良くても、知らない男性に突然手を伸ばされたら避けるに決

まっている。

不安と緊張で心臓は早鐘を打ち、背筋が冷たくなった。あなたは誰なのか。そう尋ねようと口を開いたけれど、掠れたような音が漏れるだけで、自分でも驚くくらいに喉が哽れていた。

「ああ、喉が乾いているのか。待っている。すぐに持つてこさせる」

男性がそう言って優しく微笑むと、その背後で音がした。

見ると、廊下に黒いスーツの男たちがざらりと控えて、恭しく頭を下げていた。

「ひっ……」

廊下に控えている男たちは、誰がどう見てもその道の人たちだった。

スーツの上からでもわかる鍛えられた肉体に、厳つい顔付き。何人かの顔には傷や火傷の痕が見える。

この人たちは誰なんだろう。そしてどうして私はこんなところにいるの？ 私はただ、眠っていただけなのに。

昨日の夜は普通に……あれ？ 眠る前のことをうまく思い出せない。

思い出そうとしても、見慣れない景色がぐるぐる回り出して灰色になるばかりで、頭が痛くなってきた。

「悪い、驚かせたか。調子が悪いなら寝ていい」

男が心配そうに私の顔を覗き込んでくるけど、どうしてこの人は見ず知らずの私のことをこんなに心配してくれるんだろうか。まるで愛しい恋人か奥さんが倒れたみたいに。私の彼氏、こんなに心配してくれない気がする。

「若、水と白湯をお持ちしました」

誰かが枕元にお盆に乗ったグラスと湯呑みを置いた。グラスの方は切子だろうか。照明をキラキラ反射させて輝いている。

湯呑みの方もよくわからないけど高そう。

そして今うっかり聞き流しそうになったけど、この男の人に呼びかけるときに「若」って言いました？

薄々とかほほほここがそういうお家なのは感じてたけど、本当にそうなの？ というか、あなた、「若」なんですか？

ますますわからない。どうしてそんな人が私の心配をしているの？ なんで湯呑みを手渡したりしてくれるの？

「熱すぎたら言ってくれ。それとも水の方がいいか？」

私の手の中に収まった湯呑みは人肌よりやや温かいくらいで、中身の白湯はちょうど飲み頃といった感じだ。

喉はとても渴いていたし、見た目も匂いもおかしなところはなかったから恐る恐るひ

と口飲んだ。

渴いた喉をぬるいお湯がじんわり潤してくれる。

半分ほど飲んだところで、私は湯呑みをお盆に戻した。

「もういいのか？ それか茶か、他のものがいいか？」

「だい、じょうぶ……です」

喉が細くなつてしまったみたいになく声が出せない。色々聞きたいことがあるのに、絞り出したような掠れ声にしかならなかった。

「そんな声で言われてもな……喉にいい茶でも用意させるか」

男がそう言った瞬間に、誰かが立ち上がって歩き去る。状況的に、そのお茶を用意しに行つたんだろう。この場において、この男が言うことは絶対だ。

そう思わせる圧倒的な何かが、この人にはある。

いったい何者で、どうして私を心配するのか。

「あなたは、だれ、ですか」

「は？」

……その瞬間、空気が凍り付いた。

例えようもない圧迫感が肺を押す。私は何か、まずい質問をしてしまったのだろうか。でもこの人と私は初対面だ。初対面のはずだ。

どうして、と後ろに控えている人たちの方を見ると、彼らは一様に目を逸らして、何かに怯えるように口元を真一文字に結んでいた。

何か教えてくれそうな人はいないかと首を動かそうとしたとき、両頬を挟まれて無理

矢理視線を固定される。

男の瞳が見開かれ、暗い瞳が私を凝視していた。

「何の冗談だ？ 梨枝子」

梨枝子、小山梨枝子……私の名前だ。

私とこの人は知り合いなの？ 嘘だ。だってこんな目立つ顔の人を簡単に忘れるはずがない。

店にやってきたら店員の間で丸一日話題になりそうな、そこら辺の芸能人顔負けの容姿に、圧倒的な存在感。

今はそれがより際立って、怒らせてはいけない人を怒らせてしまったと、私は泣きそうになった。

けれど知らないものは知らない。どうしてこの人が怒っているのか。どうして私はここにいるのか。

「……出てけ。全員」

低い、苛立ちを孕んだ声。

私ではなく、背後に控えている人たちに向けられた言葉なのに、背筋に冷たいものが走った。

数秒もしないうちに襖が閉まって、広い部屋に私と男だけが残される。

男は私の頬からゆっくり手を離すと、その場に腰を下ろして長く息を吐いた。

「梨枝子、もう一度聞く。何の冗談だ？」

「冗談じゃ、なくて……本当にわからない、んです」

我ながら消え入りそうな声だ。自分の喉の太さがストロークくらいしかないんじゃないかかってくらい声が出ない。

「どうして、私の名前を知っているんですか」

「知っていて当然だろ。本当に何も覚えていないのか？」

何も覚えていないのとは違う気がする。

自分の名前も働いている場所も友人の顔も思い出せる。この人のことだけがわからない。

私は少し首を横に振った。

直後に男のまどう雰囲気が変わった。

「俺のことだけわからない……そういうことか？」

男は私の左手首を掴んだ。そして見せつけるように私の目の前に左手をもってくる。

……薬指に細身のダイヤの指輪がはめられていた。そして私の手首を掴んでいる男の指にも、白銀に煌めく指輪が見える。

つまり、私とこの人は知り合いどころか、婚約もしくは結婚してること!? いやいや、どうして私が（おそらく）ヤクザ屋さんの偉い人と？ 結婚？ というか私、彼氏いるはずだよ。

関係については理解してしまったけど、なんで？ どうして!?

男は私の反応を伺っていたけれど、私が口をぽかんと開けたまま固まったのを見てため息をついた。

「……本当に何も覚えていないのか」

怖がらせて悪かった。男はそう言って手を離す。

「上条志弦だ。聞き覚えもないか？」

「すみません。わからない、です……」

上条さん……全く聞き覚えがない。知り合いにもそんな苗字の人はいないはずだ。

「記憶喪失、か。まああんなことがあった後だからな……一時的なモンかもしれねえし、しばらく様子見か」

洪々といった様子で上条さんは引き下がった。

「す、すみません」

「謝るな。梨枝子は悪くねえ」

そう言うって上条さんは先ほどまでの冷たく重い雰囲気振り払って、私を落ち着かせるように微笑んだ。

私は思わず左手首をさする。強く握られたせいか手首に残る熱が、今もなお尋常でない状況に置かれていることを訴えていた。

「あ、あの……」

「どうした？」

聞きたいことが多すぎる。

私と上条さんの関係、どうして記憶喪失になんてなってしまったのか、ここはどこなのか、上条さんは何者なのか。

上条さんは静かに私を見つめている。

「目が覚めたばかりで混乱してらんだろ。また夕方にでも顔出すから、そんな時にまたゆっくり話すか」

そう言うって上条さんは立ち上がると、私の頭を二、三度優しく撫でて部屋を出て行った。広い部屋に一人残された私はただただ呆然と閉ざされた襖を眺めていることしかできない。

私はばたきと布団に倒れた。左手を上げて、指輪に触れる。

……あの人と、結婚？

硬く冷たい金属の質感が、これは夢じゃないと言っている。

でも、夢と言われる方がまだ現実的だ。

私はただ、普通の喫茶店で働く普通の生活を送っていたはずだ。上条さんじゃない彼氏もいて、それなりに平和に平凡に生きていた。

上条さんみたいな人と知り合いになる余地なんてない。しかも結婚なんて、そもそも考えてもいなかったのに。

そうだ彼氏……雄吾ゆうごに連絡してみよう。

雄吾は大学の後輩で、私の卒業前からだからもうすぐ付き合って二年になる、はずだった。

今の状態だと何かあって別れたのかもしれないけど、少なくとも何があったのか知っていないはずだ。

……と思いついたものの、スマホが見当たらない。

枕元や畳の上にはそれらしいものがなかった。

どこかにしまっているのだろうか。とりあえず床の間の横の戸を開けてみる。中は空っぽだった。

別の場所を開けてみても、布団が高く積まれていたり、座布団が入っていたり、私の

私物がどこにもない。

この部屋にはないのだろうか。そう思って恐る恐る上条さんが出て行った襖を開ける。「ひっ」

思わず声が出て、そのまますぐ襖を閉める。

開けてすぐのところに、怖くて厳ついお兄さんが立っていた。それも複数人。

見張り、というやつだろうか……上条さん、「若」とか言われてたし、かなり上の立場の人なんだろうけど、なんでまた私なんかを……

「失礼します」

あたふたしていたら外から声をかけられた。

あまりにびっくりして「ふあい？」なんて上擦った声で返事をしてしまい、穴があつたら入りたい。

「……何か御用ですか」

「えーっと、私のスマホ、どこにしまってるのかご存知ありませんか？」

「お隣の部屋が姐さんのお部屋ですが、そちらになければ存じ上げません。何か調べ物ですか？」

あ、隣の部屋も私の部屋なのか。あとで探してみよう。

「ちよっと連絡を取りたい人が」

「どなたでしょうか？」

「それは……」

元(?) 彼氏の雄吾です。なんて言ったら仮にこの人が持っていたとしても、絶対渡してもらえない気がする。

どう答えたものかと悩んでいると、カリカリと引っ掻くような音がして、私はそちらを見た。

私の部屋だという部屋の逆側の襖の向こうに何かいるようだった。

「すみません、ちよっと失礼します」

鍵がかかるわけでもないで開けようと思えば普通に開くはずだし、少し下の方から聞こえるから野良猫でも迷い込んだんだろうか。

開けてみると、何やら黒い塊が突進してきた。勢い余って部屋の真ん中でターンすると、私の方に向かってくる。

黒い犬だった。

懐かれているのか、前脚を私の太腿の上あたりに押し付けて立っている犬は、目を輝かせて尻尾を振っている。

……なに、この可愛い子。

大きさは柴犬をひと回り大きくしたくらい。顔付きと身体を見るに日本犬……甲斐

犬っぽいけど、それにしても毛足が少し長い気がする。洋犬の血が混じっているんだらうか。

子どもの頃実家で飼っていたコリーを思い出す。

まあ、犬種が何にせよ可愛いことに変わりはない。

どうやら懐いてくれているようなので、首の下辺りを触らせてもらおう。

柔らかい。もふもふ。毛艶もいいし、首輪もしているから飼い犬なのは間違いないさそう。それにこの子を撫でているとなぜか安心する。組の誰か、もしくは上条さんの飼い犬だろうか。

「だ、大丈夫ですか？」

外の人が心配そうに声をかけてくる。

「あの、黒い犬が……」

「コウさんがそちらに？ 確かに散歩の時間ではありませんが」

この子はコウつて名前なのか。男の子だからコウくん……なんとなく馴染みがある気がする。

にしてもヤクザさんにさん付けされてるのか、犬。ということとは、上条さんの飼い犬？

「この子……コウさんの飼い主は上条さんですか？」

「……え？ そうですが、姐さんも散歩行かれたりしてましたよね」

なんでそんなことを聞くのかと言いたげな声音だった。どうやら私もこの子を可愛がっていたらしい。

まあこれだけ可愛い子、近くにいたら絶対可愛がるけども。

コウくんは何かを期待する目で私を見上げてきた。

「ああ、いた。すみません姐さん。散歩用のリードに変えようとしたら急に走ってそちらに……」

コウくんがやってきた方からリードを手にした別の上条さんの部下らしき人がやってくる。

「このところ姐さんと離れていたんで、会いたかったのかと……散歩は自分が行きますから、姐さんは休んでいてください」

「ええ、まあ、この状況で散歩には行けないですね……」

散歩の時間だというから、散歩をせがまれているんだらう。二つ返事でOKしたいところだけど、散歩ルートどころかこの辺りの道知らないし、あの上条さんの愛犬が私が散歩させていいんだらうか。

「ごめんね、行けないんだ……」

頭を撫でながらそう言うと、コウくんは前脚を下ろしてお座りの姿勢をとり、寂しげに見上げてくる。

うっ……罪悪感。

そうしている間にコウくんはリードをつけられていた。

「姐さんはお疲れだから、な？」

その声をかけられてリードに繋がれたからか、コウくんは諦めたように立ち上がる。

若干の抵抗を見せながらも、上条さんの部下に引つ張られたコウくんは散歩に出かけていった。

その後ろ姿を見送りつつ、突然の犬の登場で停止していた脳を復帰させる。

何の話だったっけ？ えっと、そうだ、連絡相手。

「ええっと、連絡を取りたい相手ですよね」

「はい」

私は上手く回らない頭をなんとか動かして職場のオーナーに、と嘘をつく。

「お仕事は辞められたと伺っていますが……」

「辞めた？」

喫茶店を？ 辞めた？ え、どうして？ 覚えはないけど結婚するから？

「ええ、三ヶ月ほど前に」

「さ、三ヶ月……？」

そんなに前に辞めたの？ だって私の中ではまだ仕事は続けてるし、辞めるものにも

最後に仕事に行ってから三ヶ月も経っているはずがない。

「あの、今は何月何日ですか」

こんな時間旅行者のテンプレみたいな台詞を本気で言う日が来るとは思わなかった。

そして襖の向こうの人が教えてくれた日付けを聞いた私は言葉を失った。私が覚えている日付けより少し前だったから。

「えっと……少し前に丸々食品の工場が火事になりましたか？」

何か日付けに確証が持てる情報はないかと、ぼろぼろの記憶を辿ってすぐに思い浮かんだのはそんなニュースだった。

ここの会社のチョコが好きでたまに買っていて、体感的には一週間前くらいのニュースだ。

「それは去年の今頃ですよ」

その言葉を聞いて、驚きのあまり私はその場に膝を付いた。

一年前……私の記憶はそこで止まっている。

「大丈夫ですか、姐さん？ 去年のニュースがどうかしたんですか？」

外の人が何か話しかけてくるけど、内容がまともに頭に入ってこなかった。

たった一年。でもその間に何があったら雄吾と別れて上条さんと出会って結婚することになるのだろうか。思い出そうとしても、記憶の中の私は普通の日常を過ごしていた

だけで、上条さんと出会った覚えも雄吾と別れた覚えも、コウくんのお世話をした覚えもない。

無理矢理思い出そうとするけれど、蘇よみがえるのは暗闇ばかりで、あとはズキリと頭が痛むだけだった。

「すいません。ありがとうございます……」

私はなんとかお礼の言葉を絞り出して、その場でずつと頭を抱えていた。



やがて日も暮れてきて、障子紙を通して差し込む光が橙色だんごを帯びてくる。

夕方に顔を出すという言葉のとおり、十八時を回った頃に上条さんはやってきた。

「中知なかちから聞いた。ここ一年の記憶がないのか？」

布団の上で膝を抱えている私の横に座った上条さんは優しく背中を撫でてくれる。

私はゆっくり頷いた。

「一年前ならまだ会ってねえな。まあ、少しずつ思い出すだろ」

……やっぱり、一年前にはまだ上条さんに会っていないんだ。

でも、むしろたった一年で何があったらこの人と結ばれることになるんだろうか。

「私と上条さんは、どうやって知り合ったんですか」

「上条さんじゃなくて下の名前前で呼べて、あんだだけ教え……言ったんだが」

上条さんは不満げに鼻を鳴らしながらも、丸々忘れたなら仕方ないのかと独り言のよううにこぼした。

「会ったのは北の繁華街だ。面倒な客引きに捕まってたから助けた」

北の繁華街、あのホストクラブやらキャバクラやなんかが立ち並ぶところかな。一年前の私はなんでまたそんなところに行ったんだろうか。

「正直梨枝子のこの話は忘れたいんだが……そんな時付き合ってた男に二股されて、自棄あきらになって来たとか言ってたな」

「ふ、二股？ 雄吾が？」

その瞬間、肩に回されていた上条さんの手に力が入る。よっぽどこの話をしたくないらしい。

私としては推理ものを読もうとしたら、一ページ目に犯人と動機とトリックが書かれていたような衝撃で、しかもそれは自分のことだから詳細が気になるけど……あまり聞かない方が良さそうだった。そのうち思い出すんだろうか。でも、今のを聞いても小説を読んでみるみたいで実感が湧かない。

「思い出させない方がいい気がするきたな。もう俺と結婚して終わりでもいいだろ」

「それはさすがに、急すぎると言いますか……準備も何もできません」  
 「なにもする必要はない。俺のモンになってくれさえすれば」

上条さんは当然のように言い放った。

このままでは本当にこの人と結婚することになってしまいう気がして、私は話題を変えた。

「いったい、私に何があったんですか？ 頭を打ったとか、事故にでも遭ったんですか？」

「……無理に思い出すことじゃない。忘れたいから、忘れたんだろ」

上条さんの瞳が細く窄められる。

冷たい氷のような視線に、この人は裏の社会の人なんだと、改めて実感した。

「目が覚めた時、俺のことを忘れたなんて言うから驚いて責めるような言い方になったが、記憶喪失になるくらい、嫌な思いしたんだろ。忘れたままでもいい。その程度で俺の気持ちは変わらねえ。コウも相変わらず梨枝子には懐いてるしな」

「で、でも、何も覚えていないのにけっ、結婚なんて……」

そもそも上条さんのことも全くわからない。ヤクザの偉い人、そんなとんでもない情報しかないのに。

「まあ今は疲れてるだろうしゆっくり休め。梨枝子、海老好きだろ。いい牡丹海老を仕

入れさせたから、後で一緒に食べるか」

私は何も覚えていないのに、上条さんは優しい。どうしてここまで気に入られてしまったのか。一年前に戻った平凡な私にはさっぱりわからなかった。

## 第一章

……あ、もうこんな時間か。

最近の出来事を知らないのは困るだろうし、何より退屈だろうということ、山積み  
 の新聞と上条さんが貸してくれたパソコンでここ一年間のニュースや流行り廃りを眺め  
 ていたら、結構遅い時間になってしまった。なんなら日付が変わっている。

政府の偉い人の汚職、外国の選挙結果、芸能人の結婚、近くに動物園がオープンして  
 いたこととか、一年もあれば色々な出来事が起こるらしい。

つい夢中になってずっと同じ姿勢でパソコンの画面を眺めていたからか肩の辺りが  
 凝ってしまったので、私は立ち上がって大きく伸びをした。目も疲れてきたし、そろそ  
 ろ寝ようかな。

明かりを消そうと照明のスイッチを探す。右手の壁にあったので、それを押して部屋

を真っ暗にした時だった。  
 急に背筋が冷たくなって、心臓がドンツと飛び上がるように脈打った。  
 心臓がおかしくなってしまうたからなのか、呼吸まで浅くなって指先も細かく震え始める。

どうして、怖い。狭い、怖い、助けて、怖い、怖い、暗い……  
 喉元に何かが進み上げてくる。

これはまずい、そう感じた私は咄嗟に照明のスイッチを拳で叩いた。  
 数回の点滅の後、柔らかな光が部屋を包む。

深呼吸を何度か繰り返すと、少しずつ動悸は治まっていた。

私はよろよろと布団の上に倒れ込む。

そのまましばらく照明を見上げて、まだ僅かに先程の余韻を残す心音を聞いていた。  
 いったい、なんだったんだろう。

先ほどの私は明らかにおかしかった。あの感覚を思い出すだけでも冷たいナイフを首筋に押し当てられたようにゾクリとする。

明かりを消したからだろうか。というよりは、明かりを消して真っ暗になったから、暗闇が怖い……から？

どうしてだろう。私は普段から寝る時は常夜灯も点けずに真っ暗にして寝ている。子

どもの頃からそうだ。むしろ寝る時は真っ暗じゃないと眠れないくらいなのに。

消えてしまった記憶と何か関係があるのだろうか。

だとしたら……

私はゆっくりと立ち上がってスイッチの前に立った。

指先でスイッチに触れる。既に心臓は弾けそうなほど激しく脈打って、身体の全細胞が止めろと言っている。でも、それじゃきつとなにも解決しない。

私はスイッチから目を逸らしつつ指先に力を込めた。パチツと音がして、視界が暗転する。

全身の毛穴が一気に開いたような感覚。冷たい稲妻が脳を撃った。

耐えきれずに私は再びスイッチを押した。

真っ暗だったのはほんの数秒のことだったと思う。それなのに冷や汗が頬を伝って、心臓が痛いほどに脈打っている。

私は大きく息を吐いて布団の上に座り込んだ。

まだ鳥肌が残っている。けど今ので確信した。私は暗闇が怖いんだ。

理由はさっぱりわからない。とにかく、怖い。

雷の音を聞いてなんとなく不安な気分になるのとは全然違う。とにかく怖い。身の毛がよだつ不安に全身が支配されて、無力になる。

目を閉じたときの暗闇すら恐ろしくて、私はただ自分の腕を撫でていることしかできなかった。



どれくらいそうしていただろう。

心臓の音は徐々に落ち着いて、静かな部屋に時計の秒針が動く音だけが響いている。何もしていないけれど身体は重く疲れていて、眠ってしまったら楽なのに、まふた 瞼の裏側にある暗闇がそれを阻んでいた。

「なんだ、まだ起きてたのか」

そのどこか嬉しそうな声に、私は畳の縁から顔を上げる。

けれどその声は私の顔を見てすぐに、不安げなものに変わった。

「梨枝子？ どうした。顔、真っ青で震えてるぞ。寒いんだったら布団入れ」

上条さんは慌てた様子で早く布団に入るよう勧める。寒い、というのは事実なので、私はずもぞと布団に包まった。

「温かいもんでも飲むか？ 湯たんぼとかいるんなら用意させるが」

「大丈夫、です」

「どこが大丈夫だ。医者呼ぶか」

「お、お医者さん呼ぶほどじゃ……」

「なんかあつてからじゃ遅いだろ」

お腹が痛いとかそういうものだったらお医者さんでいいだろうけど、これはお医者さんを呼べばどうにかなるものじゃない。

「ちょっと眠れなくて。ニュースとか一気に見過ぎたんですよ」

「ならないが、無理するなよ」

「はい。すみません……」

心配をかけてしまった。上条さんはこんな時間なのにまだスーツだから、きつと忙しいんだろう。

一晩くらい寝なくてもなんとかなるし、なんなら眠くなれば自然に眠れるかもしれない。

「目が冴えちゃってるだけです、たぶん」

気を張りすぎているのかもしれない。暗いってうちよつとした不安に、過剰に身体が反応しているのかも。

上条さんはゆっくり息を吐いた。

「寝るなら電気消すか？」

「……っ、ダメっ！」

思わず叫んでしまった。上条さんはぎよつとした顔で私を見る。

「ど、どうした？」

私はハッと我に返って慌てて謝った。

「す、すみません。暗いとその……不安みたいで、明るいままで寝ますから」

「寝る時は全部消してただろ？ その方がよく寝れるからって」

「それは……寝る時は真っ暗の方が落ち着く、はずなんですけど……今は疲れてる？  
の……」

どうしたものか。常夜灯なら大丈夫かな……？ いや、ダメだ。暗くなると考えるだけで身体が強張って、心臓だけが激しく動く。

上条さんは固く布団を握る私の手に自身の手を重ねた。手の甲に触れる冷たい体温が心地良い。

「暗いのが怖いのか？」

「まだ寝る気分じゃないというか、もう少し新聞読もうか、な。なんて……」

暗い色の瞳が真っ直ぐ私を見ている。

この人に、会ったばかりの上条さんに今以上に余計な心配をかけたくない。

そう思ってなんとか誤魔化そうとしたけれど、あっさりと見抜かれて観念した私は短

く頷いた。

「ちよつと不安で。でも、真っ暗じゃないと絶対寝れないってわけじゃないです。お昼寝したりもしますし。横になっていれば自然と眠くなりますよ。大丈夫です」

学生時代にカラオケでオールした翌朝なんて、自宅に帰って横になれば下がたとえ床でも、そのまま夕方まで寝たりしてた。

だから限界を迎えたら勝手に眠くなって、寝る。はず。

「こんな状態で大丈夫なんて言われても、俺がよくねえよ。とりあえず飲むもの持ってこさせるから、それ飲んで落ち着け」

子どもをあやすように上条さんは私の頭を撫でる。

「その間に風呂行つとくか。なるべくすぐ戻って……梨枝子、どうした？」

不思議そうに上条さんが私を見下ろす。

私は立ち上がろうとして離れた上条さんの手を掴んで引き留めていた。なぜこんなことをしているのか、不安だからなのか、寂しいからなのか、自分でもわからない。

「梨枝子……」

上条さんは逡巡<sup>しゆんじゆん</sup>するような表情を見せた。けれどそれはほんの数秒の間で、気づけば私の背は敷き布団に縫い留められて、すぐ目の前にモデルのように整った上条さんの顔があった。

「こんな状態だから我慢しねえとは思ってたが……無理そうだ」  
 そう囁く掠れた声が、耳元にかかった髪を揺らす。

私とその言葉の意味を理解できないでいる間に、上条さんは私の上に覆い被さった。  
 「ふっ……んっ！」

息ができない。唇を塞がれたからだど気付いても、両手を押さえ付けられていて抵抗  
 できなかつた。

唇の間から差し込まれた柔らかな舌が、上顎、奥歯、犬歯、舌の裏側……触れられる  
 部分全てを蹂躪する。

重ねられた唇では呼吸もままならなくて、時折唇を離されるたびに息を吸うけど、私  
 が呼吸するとすぐにまた塞がれてしまう。

それを何度も繰り返される。  
 ようやく解放された時には唇がじんじん痺れて息も上がっていた。

「いい顔だ、梨枝子」

酸素が足りていないクラクラする頭は私の視界も霞ませる。

「久々に見るな、梨枝子のその顔。初めて抱いた時を思い出す」

「え、私……」

彼氏の雄吾とすらまだそこまで至っていないのに？ まあ、結婚前提の男女交際ならそ

ういうことはするかもしれないけど……え!? この人と、しちゃったの？

「これじゃ足りねえか。いや、足りねえな。俺も」

混乱のあまり焦点の合わない目で見上げると、上条さんは慣れた手付きでネクタイを  
 緩めてスーツの一番上のボタンを外した。

「忘れたなら何回でも一から教える。安心しろ、梨枝子のコトは全部知ってるからな」

そう言って艶っぽく微笑んだ上条さんは片手で私の両腕を押さえ付けると、空いた手  
 でスリリとネクタイを外す。そして贈り物にリボンをつけるような気軽さで、それを私  
 の両手首に巻き付けた。

「念のため最初はこうしとくか。あんまり動くと危ないだろ？」

拘束されたんだと脳が理解したときにはもう遅かった。

上条さんは安心させるように優しく啄むような口付けを落としながら、浴衣の間から  
 胸元に手を這わせる。

「まって……そんなとこ、触っちゃ……!」

胸の膨らみを確かめているのか、上条さんの手が柔く私の胸を掴んでは離すを繰り返す。  
 返す。

「大丈夫だ。痛いことはしねえよ」

上条さんは諭すように耳元で囁く。そのまま生温かく柔らかいものが耳に触れた。

それが離れると、そこが空気に触れてヒヤリと冷える。温かい感触と冷えとが交互に繰り返されて、私はわけもわからず溢れそうになる悲鳴を押し殺していた。

「……っ！」

「相変わらず耳が弱いな」

舌をちらりと出しながら上条さんは挪揄うように言った。

「まあ、梨枝子は全部弱いけどな。いや、弱くなったのか」

喉の奥で短く笑った上条さんは、呆然と虚空を眺めている私の浴衣の合わせをこじ開けて、次は下着の間から直接肌に触れた。

冷たい指先が沈み込んで、胸が形を変える。

指と指の間に頂を挟み込み、小さく円を描くように動かされるたびに、内側から心を揺さぶる何かが迫り上がってきた。

「やっ……！！ まって……」

上条さんの手を払い除けようにも、両手は頭の上で拘束されていてびくともしない。

加えて胴体も上条さんの身体で押さえ付けられていて、身体を起こすこともできなかった。

「逃がさねえよ」

硬いものが下腹部に押しつけられる。ズボン越してもわかる膨らみは、今にもはち切

れそうだった。

背筋に冷たいものが走る。

「安心しろ。いきなりはしねえ」

そう言って上条さんは身を起こす。猛烈に嫌な予感がした。

上条さんは逃げようと身を振った私の脚を掴んで広げさせると、その間に腰を下ろした。

「浴衣はちゃんと着ろ。すぐ崩れるだろ」

その言葉通り、私の身を包んでいたはずの浴衣はただの布と化して、帯だけがお腹の辺りに載っていた。

これからどういふことが行われるのかを知らしめるように、上条さんは膨らみをショーツに越しに擦り付ける。

「やあつ！ かみ、じょうさんっ……！！ だめっ！」

ごつごつした感触があまりにも衝撃的すぎて、私は抵抗できないままただ感じていることしかできなかった。

その間にも、その膨らみは膨張して存在を増していく。

「痛いことはしねえよ」

「だ、だって、恥ずかしいし、わからないから……」

「そうか？ 身体はわかってるみてえだけだな」  
 そう言うって上条さんは胸の頂に手を伸ばす。硬くなったそれを指先で弄び、口に含んだ。乾いた唇がその周りの皮膚を刺激する。

「んんっ……！」

「声、抑える必要はねえぞ。俺は梨枝子を感じる声が聞きたい」

上条さんはショーツの上から指の関節で秘所をなぞった。

そのままスリと内側に入り込んだ指先が花芯を突く。

触れられた瞬間、電撃が下腹部から脳に走って、私の口から甘く湿った声が漏れる。

「やっぱ梨枝子の声はいいな」

上条さんはビクリと跳ねる身体を押さえつけて恍惚こうごとした笑みを浮かべ、花芯を弾いた。

「んっ……」

一瞬、視界の端に星が飛んだ。唇を閉ざしてなんとか堪こたえたけど、何度も攻められて意識が遠のくたびに、どんどん緩んでいく。

「そうして意地張ってる梨枝子も悪くねえが、快楽に身を任せた方が早く楽になるぞ？」

「これ以上は、おかしくなっちゃうから……んあっ！」

「おかしくなる？ いいな、それ。そのまま落ちて眠れ、梨枝子」

頭の中で「ぐちゃり」と、なんとも卑猥な音が響いた。

上条さんの指が私の内側に入り込んで、壁を撫でている。

指の先が自分でも触れたことがない奥深くを突いて、その瞬間に私の中で何かが弾けた。

「んんっ！ ひゃうっ！」

なんの意味もないただの音が次々に口から漏れていく。上条さんは何かを確かめるように指先でぐるりと内側に円を描き、やがてなんの前触れもなしに沈める指を二本に増やした。

「んあっ……！」

入り口を広げるように二本の指の間を開け、さらにもう一本をその二本の上に重ねるように滑り込ませる。

「もう十分だろ。まあ、指の前から十分すぎるくらい濡れてたけどな」

上条さんは抜き去った指先にまとわりついた蜜が糸を引く様を眺め、意地悪く微笑んだ。

そんな表情を、色っぽいなんて思ってしまった私の頭は、もうだめなのかもしれない。ヤクザにこんな風に抱かれる日が来るなんて、誰が想像するだろうか。あまりにも非日常的で扇情的なその光景に、私は見惚れてしまう。

「こんな短い時間で、随分といい顔するようになったな。何か思い出したか？」  
嬉しそうな上条さんの声でさえ、私のお腹の底を震わせる。

そんな中、カチャリという金属音が私を現実呼び戻した。  
上条さんが正面をくつろげて、その欲望を露わにした。

そそり立つ大きな赤黒いものは、本当に人間の身体の一部なのかと疑いたくなる。  
あれが今から……？ 指が入ったからって、あんなものが入るとは到底思えない。いや、入るわけない。

その結論を出した時には、もう遅かった。

「欲しかっただろ？」

上条さんはそう言って入り口に先端を押し当てる。そのまま軽く挿し込まれた瞬間、入り口が広がるのがわかった。

「ひっ……」

熱く硬いものが内側に入ってくる。

内壁と擦れるたびに私の身体は電撃に打たれた魚みたいに跳ねて、湿った声が明るい和室に響いた。

上条さんは小刻みに腰を揺すりながら私の脚を引いて、奥へ奥へと自身のものを沈めていく。

「あっ！ んん！ だめ、ぬいて……」

私と上条さんの間はまだ離れている。それだけ上条さんのものにはまだ余裕があると  
いうことだ。

一方で私の身体はもう限界だった。これ以上続けられたら、パンッと風船みたいに弾けてしまう。そんな気がした。

「怖がらなくても、これまでずっとできてたから大丈夫だ。力み過ぎだろ」

上条さんは自身のもので押し広げて露わにした花芯を爪の先で軽く掻いた。

短い悲鳴が漏れた直後、再び高く甘い嬌声きょうせいが響く。

「な？ ちゃんとできるだろ」

私の内側に、上条さんのものが収まっていた。

けれどそれは例えるなら、子ども用の靴下に大人が足を入れたようなものだ。すぐに破けてしまう。

「わ、わかりましたから、抜いて……」

抑えきれない熱が、私自身の内側からも溢れて止まらない。

首を小さく横に振って私は懇願する。これ以上は、壊れてしまう。

身を振って逃れようとしたけれど、両手の自由は奪われている上、両脚も上条さんに  
掴まれているせいで、ほんの僅かに後退することすら叶わない。

「思い出せ、なくて、ごめんなさい。謝りますからっ……!」  
 そう言った瞬間、上条さんはずるりと自身のものを引き抜いた。解放されるのか、そう思ったのも束の間、すぐにまた奥へと、次は一気に押し込まれる。

私は声にならない悲鳴をあげた。

「言つたら、梨枝子は何も悪くない。忘れても何回でも一から教えてやる」

上条さんは私の下腹部を優しく撫でた。

その真下に、この人のものがある。それを克明に感じさせる仕草だった。

「忘れるんならその度に何回でも刻み込めばいい。まずは簡単に、自分は誰のモノなのか言ってみろ」

上条さんは私の中に押し込んだもの、その存在を知らしめるかのように腰を揺らして奥へと挿し込んだ。

「記憶失くす前はちゃんと覚えてただろ？ 梨枝子」

「……わか、らない。なにも……んっ!!」

「わからないわけねえだろ。本当になんも感じねえか？ 足りねえならもっと激しくするが？」

「こ、これ以上は……ンンッ!」

私の言葉を遮ろうとするように上条さんは腰を揺すった。

内側で擦れ合うたびに脳が痺れて、肌と肌がぶつかるたびに蜜が溢れる。どんどん粘度が増して卑猥になる音が耳を犯した。

この音を、私は知っている。

『おかしくなれ、梨枝子』

同時に響く低い声は、どこから聞こえてくるのだろう。

「あっ! いやっ! もう、もうやめて、志・弦・さん!」

わけもわからず私は叫んだ。すると、上条さんはびたりと動きを止める。

「ど……どう、したんですか？」

「いや……存外、身体は覚えてるもんだな」

覚えてる……? こんな、強烈な感覚を?

荒く息を吐きながら上条さんを見上げた。上条さんも僅かに息が上がっているのか、ゆっくり肩を上下させている。

「上条さんとこんな、ことしたら、忘れ……んんっ!」

忘れるわけがない、私がそう言い切る前に、上条さんは抱えていた私の両脚を力任せに引いて、自身のものをさらに深く沈めさせた。

奥に触れたそれは、内側をこじ開けてようやくよく止まる。

あまりの衝撃に、私の頭の中はしばらく真っ白に染まった。

その間、私の口からは高く甘い音が切れ切れに漏れ続けて、痺れるような疼<sup>いた</sup>きが身体中を駆け巡る。

「ひっ……あっ、ああっ……！」

「もう忘れるなよ、梨枝子」

ヒクヒクと痙攣している身体を見下ろして、上条さんは満足気に微笑んだ。



あの後、私は何度貫かれただろうか。

数えるのはとくに億劫になったというのに、上条さんはまだ攻める手を緩めてくれない。

すっかりぐずぐずになった私の腰を引き上げて、背後からの抽送<sup>ちゅうそう</sup>を繰り返される。

「あっ！ んんっ！」

喉は嘎れて、掠れた嬌声が漏れる。

それをよそに、互いの体液で潤った秘所は水音を立て続けた。

「……ッ！」

やがて上条さんの身体が震えて、私の腰を支えていた力がなくなった。

そして内側を支配していたものがずりりと抜けて、私の身体は嵐の後のように波打ったシーツの海に倒れ込んだ。

荒れた呼吸がおさまらない。身体に刻み付けられた熱がジリジリと肌を焼くように燻っている。

上条さんは片腕で上半身を支えるように布団の上に座って、私を見下ろしていた。

「……決めた、梨枝子。俺は今日から毎日、お前を抱く」

「へ？」

幻聴、だろうか。幻聴だと思いたい。

けれど上条さんは不敵な笑みを浮かべて、さらに口を開く。

「大丈夫だ。無理な日は言えば無理強いはしねえ。ちゃんと配慮<sup>ちりょ</sup>もする」

……いや、気にしてるのはそういうことではなくて。いや、気にはするけど、今はそれじゃない。

「どうして、毎日も、されたら私……」

こんなことを毎日されたら壊れてしまう。肉体的に……もそうだけど、精神的にも。

この行為が私にもたらしたのは、一人の人間の許容量を超えた快楽だ。甘い物は美味しいけど、甘すぎるものはかえって苦痛になる。甘いことしかわからなくなってしまう。

「いや、です。何も、わからなくなっちゃう……」

「いいんだよ。それで。トラウマもひっくるめて全部忘れて、俺のモンになれ、梨枝子」  
上条さんはうつ伏せになった私の身体の上に覆い被さると、首筋に歯を立てた。  
皮膚に食い込んだ痛みは僅かなものだったけど、上条さんは執拗に甘噛みを繰り返す。  
それは首筋だけには留まらず、首筋から肩、腕、そして耳。見えないけれど噛まれた場  
所は熱を帯び、その度に上条さんに支配されていく気がした。



目を覚ましたとき、外はすっかり明るくて、壁の時計は十時を回っていた。

上条さんは上半身をひと通り噛み終えてから部屋を出ていき、襖が閉じた音を最後に、  
私は意識を失うようにして眠りに落ちた。暗いのが怖いと思う余裕すらなく、身体が  
限界だったんだろう。

「というか身体についてはまだ限界だ。」

脚の付け根、肩、首と、身体の節々が痛くて起き上がることすらままならない。加え  
て喉がカラカラで、息を吸った瞬間に咳き込んだものだから、その振動と息苦しさで余  
計に起きづらい。

なんとか起き上がって布団を捲ると、そこには昨夜の行為の痕がまざまざと残って

いた。

塩が浮いているように白っぽく乾いた肌、噛み痕、乱れて湿ったシャツ。そして、上  
半身を起こした拍子に脚の間から溢れた液体。

全身にまとわり付いた昨夜の行為の余韻が、これが現実だと主張してくる。けれど今  
はとにかくあれは夢だったんだと思いたい。

「とりあえず隠そう。何か着るもの……と辺りを見回しても何も無い。昨夜着ていた浴  
衣は乱れたシャツとほとんど一体化していて、とても着られる状態になかった。」

「ぐっ……」

私は這うようにして布団から抜け出し、手近な襖を開けた。布団が積まれた上に、綺  
麗に折り畳まれたシャツが置かれている。

本来の使い方じゃないけど贅沢は言っていられないので、私はそれを身体に巻き付け  
てそろそろと廊下に出る障子の前に移動する。

「とりあえずお風呂場を借りて身体を洗おう。確かこの部屋から出て二回くらい廊下を  
曲がれば、突き当たりにお風呂場があったはず。問題は途中でこの状態を誰かに見られ  
てしまわないかということ……」

「姐さん」

「ひえっ!」

私は咄嗟に障子から手を離して一歩後ろに下がった。  
まさか廊下に人がいたとは。え、なんで？ 私に何か御用で？ いや、とうかそこにいられたら私出られないので、一時的にでもいいのでこの場を離れていただけませんか。

そうお願いしたいのに、急な動きに身体が付いていかず、一歩下がったところで私はしばらく呻いていた。

「あの……」

「はい」

私が呻いている間も、廊下の人はじっと待っていた。何か用事だろうか。急用でなければ先にお風呂に行きたいのですが。

「何か、御用ですか……？」

「ご入浴の準備はできておりますので、今から向かわれるのでしたら人払いをしますが」  
え、怖い。いや、これ上条さんの配慮か。でも、私起きてすぐお風呂に行きたいのを、この人が知ってるのは……あ、そういえばここ、和室。私のカッスカスの声でもこうして普通に会話ができてしまうのは、隔てているものが障子で和紙一枚だから……

つまり、昨夜のあれこれ、廊下にダダ漏れ？

「ああああ……」

恥ずかしい。このまま溶けて消えてしまいたい。

結構遅い時間だったし、みんな寝てる……わけないか。とうか私がうるさかったりしました!?

二重三重の意味で居た堪れない。

「……体調が悪いようでしたら若をお呼びしますが」

「や、やめてくださいっ!」

ここで上条さんと呼ばれたら私、どんな顔すればいいの？ というかこうなってるの上条さんのせいだよな？ 上条さんがあんなことするから……って、思い出したら滅茶苦茶恥ずかしくなってきた。

「お風呂、行きますから、人払いを……お願いします……」

「承知しました」

私の表情筋と情緒はさっきからゴロンゴロン二転三転しているのに、廊下の人は始終落ち着いていて、私だけ動揺しまくってるみたいで余計に恥ずかしい。

三分ほど待つてほしいと言われたので大人しく待っていると、廊下から人の気配が消えた。

恐る恐る障子を開けて、できるだけ足音を立てないようにゆっくり進む。人払いをするという言葉を信じていないわけじゃないけど、廊下を曲がる前には誰もいないことを確

認してこそこそ移動した。

結果、誰にも会うことなく脱衣所に到着した。ありがとう、名も知らぬ廊下の人。だから脱衣所に新品の下着と浴衣が置いてあるのはなぜか、詮索はしないでおく。身体に巻きつけていたシーツを畳んで、私はお風呂場の戸を開けた。

うん、豪華。

昨日の夜も借りたけど、洗い場はふたつあって広いし、浴槽はいい香りのする檜風呂で、大きさも少し大きめのベッドくらいある。ちょっとした宿みたいだ。

全身をくまなく洗って湯船に入る。少し熱めのお湯が心地良い。

檜の柔らかな香りに包まれながら、私はしばらくぼんやりと上の窓から差し込む光を眺めていた。

これから私はどうなってしまおうのだろうか。本当にこのまま上条さんと結婚なんてしてしまってもいいのだろうか。

この立派な浴槽もヤクザの妻という立場も上条さんの想いも、私なんかが享受きょうじゅしていいものじゃない。

私は自分の頭を叩く。

けど、痛いだけで何も思い出せない。

上条さんは全部忘れてしまえばいいと言ったけど、そんなのは私が逃げただけだ。

苦しいことは全部忘れて、差し出された手に守られているだけなんて、都合が良すぎる。それに上条さんだって、こんな私をいつまでも好きでいてくれるはずがない。一年の間は何があつたのかわからないけど、たった一年だ。きつと、気まぐれとか道楽とか、物珍しさだ。飽きて捨てられて困るのは、私。

左手をお湯から出す。薬指にはめられた指輪が、陽の光を受けて無機質に輝いた。

上条さんには悪いけど、これはお返ししよう。これは今の私を着けていていいものじゃない。

私は浴槽の縁に手を突いて湯船から出る。軽くシャワーを浴びようと洗い場に座った時だった。

「……なにこれ」

左の脇腹に赤黒い楕円形の傷跡のようなものがあつた。周辺の皮膚にも僅かに引き攣れたような痕がある。

脇腹といっても背中の方で、身体を捻らないとよく見えないし、泡で見えなかつたとかで気付かなかつたんだろう。

触れてみても痛みはないし、いつどこでできたものなのかさっぱりわからない。

この一年の間に怪我でもしたんだろうか。他にもないかな、とくまなく全身を見たらもう一箇所、似たような傷跡があつた。

見たところ痕にはなってるけど治癒はしていて最近できたものではなさそうだから、私の記憶喪失とはあまり関係がないんだろうか。

それよりも、さつきから背中とか肩とか見て思ったけど、上条さんは昨夜、かなり容赦無く全身を噛んでいったらしい。

温まったからか、白い皮膚にはつきりと無数の赤が浮かんでいた。しばらく消えそうにないし、背中とか肩はともかく、首筋の痕はどう隠そうか。

お風呂上がってすぐならタオルでも巻いておけばいいけど、マフラーの時期でもないし、そもそも室内でマフラーはおかしいし……なんて鏡の前に立って考えていると、突然脱衣所の戸が開いた。

「ああ、大丈夫そうだな」

そう言うって顔を出したのは上条さんだった。相変わらずのスーツ姿で、この和風なお風呂場にはなんとも不釣り合いな格好だ。

いや、それより……

「ど、どうしてここに？」

まあ、上条さんのお宅なんだからどこにしようと思っても自由かもしれないけど、ここはお風呂場で、当然私は何も着ていない。むしろスーツ姿で入ってきている上条さんがおかしい。私は咄嗟に近くにあった手拭いを掴んで前を覆った。

## 立ち読みサンプル はここまで

「体調が悪そうだって寺前が伝えにきた。来てみたら随分と静かだったから、万一沈んでねえ心配でな」

寺前さんって、廊下にいた人か。大丈夫って言ったのに……

「もう出るつもりなので、大丈夫です。大丈夫ですからそのっ……ひゃっ！」

私はジリジリと後ろに下がったけど、すぐそこに壁があつて、ぬるい木の感触に短く悲鳴をあげてしまう。そして私は上条さんに追い込まれたような状態になった。

「そんな警戒しなくても、今は何もしねえよ。疲れてるだろうし、俺もすぐ戻るからな」  
残念、上条さんはそう言うって流れるように私の後頭部に手を回して、唇を重ねた。

そのまま空いている方の手で私の身体を抱き寄せると、冷たい手で私の背中を撫でる。抵抗しようにも、私が上条さんの身体を押ししたところでびくともしない。

唇も塞がれて声を上げることすらできず、私はただ上条さんにされるがままにその口付けを受け入れていた。

ようやく唇が離れたと思っても、すぐに再び塞がれて落ち着いて息を吸う間がない。

「ほんと、梨枝子はキスが苦手だな。鼻から吸えばいいんだよ」

「簡単に、言わないで……んんっ！」

「まあ、そんな梨枝子も好きなんだが。中途半端に十分で戻るなんて言わねえ方がよかつたな」